

上演12 2026年8月1日(土) 2校目 関東ブロック(長野県) 長野県松本県ヶ丘高等学校 『お前に自転車の乗り方を ～チェルノブイリ 1986』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 安田女子高等学校(広島県) 藪 彩音
---	--

この作品から、過去の経験を糧にして未来へ進んでいく人間の力強さを感じた。

講評委員の中には、チェルノブイリ原発事故について授業で習ったから知っているという人もいれば、名前は聞いたことがあるがよく知らない人もいた。それほど私たちの中では、過去に外国で起きた事故としか認識できていなかった。事故が起きた原因は、原子炉の構造上の欠陥や運転員による危険な実験の強行、安全装置の無効化などであることが劇中で語られていた。この悲惨な事故を発生させる環境は人間が作ったものであるといえど、人が故意に起こした事故ではないからこそ、誰も責めることができない。この劇を通して、もし私たちの家族が事故に巻き込まれたとしたら私たちはどう行動していくだろうか？という疑問と今までの無知を恥じる気持ちが湧き上がり、初めて自分事として考えさせられた。

サーシャの父親であるユーリーは、サーシャに「自転車の乗り方を教える」という約束を交わしていたが、その約束は果たされることはなく、消防士として懸命な捜索活動を行っている最中に命を落としてしまった。サーシャにとっての父ユーリーは、自転車の補助輪のように自身を支える大切な存在のように思え、父の最期について知りたいと奮闘する姿に父親という補助輪がなくても一人で進んでいくサーシャの力強さや成長を感じた。

また、サーシャは父について調べていく中で父の同僚であるレオニードと出会う。レオニードは、今まで自分一人だけが生きてきたことを悔やんでいたが、サーシャにユーリーの話を話し、ようやく今まで生きてきた意味を実感することができていた。このことから、サーシャは人に助けられるだけでなく人を救える存在になっていると感じた。

サーシャが劇中で様々な壁に衝突する際に、次第にその壁が舞台美術として佇んでいた物理的な壁としてだけでなく、人の心の壁にも見えていった。特に終盤の「コンクリートだろうが言葉だろうが人は壁を作るんだ。でも人が作ったものなら人に越えられないはずはない。」という言葉が印象的で、どんな大きな壁でも人はいつか乗り越えられるという希望を感じた。

私たちが学校で習うような授業では、原発事故による死者数などの情報を教えられるだけで、あくまで他人事のように事件を見ることが多い。しかしこの劇から、過去に起きた遠い国の原発事故ではなく、自分事としてこの歴史的事実を捉えることができた。今、私たちが家族や友人と当たり前で平和な時間を過ごせていたり、好きなことに打ち込めていたりする恵まれた環境に感謝していかなければいけないと思わされる作品であった。

